稲門やまと

発行所　早稲田大学大和稲門会
発行人　会長　石川　公弘
〒242-0006　神奈川県大和市南林間 4-9-10
事務局長　宮崎　顕
TEL・FAX　046-274-6169
編集人　宮崎　顕、瀧本幸男、児浦義文

早稲田大学大和稲門会会報第４１号

「思いやりの人」加藤英雄名誉会長を悼む　　石川公弘

大和稲門会の 2 代目会長として 8 年間尽くされた加藤英雄さんは、思いやりを形にできる人でした。加藤さんは、戦争が始まった翌年の昭和 17 年春、早稲田大学専門部商科を卒業されたばかりで召集され、中国の上海近郊で 3 年半軍務についていましたが、一発の銃弾も撃つことなく終戦を迎え、中国人に嫌な思いをされることなく昭和 21 年に帰国しました。ちょうどその頃、日本では田端義夫の「帰り船」が大ヒット、皆で故国の山をみながら「帰り船」を口ずさんだ時は、涙が止まらなかったそうです。

私の腹違いの兄も、そのころ満州から命からがら引揚げてきました。満州は加藤さんと違い相手がソ連兵だったため、だいぶ苦労したようです。二人は県立厚木中学校の陸上競技部で競っていた仲で、敗戦後も銀座や新宿で杯を重ねたと聞いています。そんな関係で私も加藤英雄さんには若いころから可愛がってもらいました。

特に思い出すのは、私が大和市長選挙に出馬して惜敗した後です。加藤さんは「通り道だ」と言って、わざわざ遠回りして我が家に寄り、落ち込んでいた私を励ましてくれました。「当選者とほとんど変わらない票を得たのだから、落ち込むことはない、胸を張れ」とか、「民主主義には勝者も必要だが、敗者も必要なのだ」とか。いつも「粕漬けのウリ」がおみやげでした。

大和稲門会の会長になっても、その後も、会の運営に細かく気を使ってくれました。役員会のためにいつも加藤ビルの談話室を提供してくれましたし、必ずドーナツをおやつにと出してくれました。ゴルフ大会とか、行事には参加賞を出してくれました。そのほか、なにくれとなく細かく気を使い助けてくれました。

人に親切にしようとはだれも「思い」ますが、思いを「やり」遂げる人は少ないのです。加藤さんは思うだけでなく、やってしまう、「思いやり」の人でした。心からご冥福をお祈りします。

ガウディに会えた！

渡辺伸明（昭和 47 年理工学部卒、昭和 56 年大学院修了）

私は理工学部の建築学科卒です。建築設計を行うことが夢でしたが、学部 4 年間でデザインセンスがないと判断して、大学院では知識のストックで勝負できる都市工学を専攻しましたが、建築デザインへのあこがれは常に抱いていました。そんな建築家の中で「アントニオ・ガウディ」は別格の存在で、長い間の憧れでした。

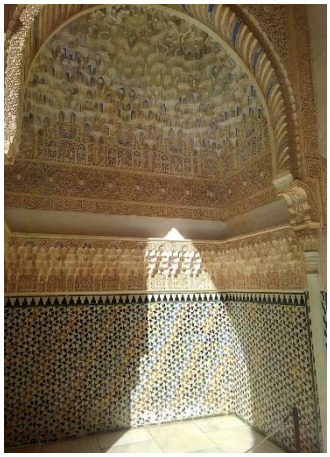
そのガウディの建築作品に会いに行くため、今回スペインに行ってきました。

スペインは正味 5 日間の旅でしたが、ガウディ以外に見どころ満載でした。印象に残っているだけでも、マドリッドのプラド美術館、郊外の世界遺産のトレド、イスラムの首都だったコルドバなどは見応えがありました。

そんな中で、グラナダのアルハンブラ宮殿とバルセロナのガウディの作品であるグエル公園、カサ・ミラ、サクラダ・ファミリア、コロニア・グエル教会をご紹介します。

スペインを含むイベリア半島全体が 711 年にイスラム教徒の侵略によりイスラム文化圏となりました。その間アルハンブラ宮殿は 14 世紀に完成しましたが、15 世紀にキリスト教軍に明け渡されて現在に至っています。アルハンブラ宮殿を見て感心するのは、まさにイスラム文化の粋を結集した建物で、美しいフォルムと細部にわたる装飾美のバランスが取れた素晴らしい建物ということです。2 番目に感じたことは、異文化の建物であったにもかかわらず、キリスト教文化が破壊をせずに現存させているということでした。

次にガウディです。ガウディは 19 世紀末から 20 世紀初頭に活躍した建築家ですが、特異なデザインで知られており、彼の建築群は世界遺産に登録されています。その代表作は何といってもサクラダ・ファミリアです。起工から 137 年経過して現在も建築中であることは有名ですが、2024 年頃には完成するとのことです。今回のツアーは外部からの見学だけで内部に入れなかったのですが、ツアー参加者の中で、入場券を独自に事前入手して入場している方もいました。次回来ることがあれば是非内部に入ってじっくり見学したいと思います。



美しいディテール

コマレス宮の中庭

カサ・ミラは内部に入場することができました。建物外部のデザインのみならず、建築内部のディテールの独創的で大胆なデザインにも圧倒され続けました。また屋上は煙突などを巧みにデザインして不思議な空間となっています。

グエル公園は、当初市場や学校、60 戸の田園住宅地として計画されたとのことですが、計画は失敗して、パトロンの家、ガウディの家など 3 軒のみ建築され、のちに公園として開放されたとのことです。しかし、計画が失敗して分譲がうまくいかなかったため公園が残り、バルセロナにとって大きな観光遺産となったとも言えます。またグエル公園のいたるところで見たことのあるようなデザインが見受けられました。これも世界中の建築家に大きな影響を与えたことの表れだと感じました。

最後にコロニア・グエル教会です。この建物は半地階のみ完成して、上部階は未完成のままですが、その天井を支える構造に特徴があります。その入り口で偶然、日本からの知人を案内するために来ていたサクラダ・ファミリアの主任彫刻師の外尾悦郎氏にお会いしました。

ガウディは 1926 年に路面電車にひかれて 74 歳で亡くなったのですが、遺体は 2 日間身元不明の浮浪者として扱われたそうです。今回のスペインはガウディに会うために来たと言っても良いのですが、建築家として成功しても身なりにかまわず、建築に情熱を注ぎ続けたガウディに触れることができて幸せな時間を過ごすことができました。

サクラダ・ファミリア

コロニア・グエル教会前で外尾氏と

ウィグル（東トルキスタン）の現状

今年（2019 年）の年明けは零下２０度と凍てつくウイグル（東トルキスタン）の首都ウルムチで迎えました。２１世紀最悪といわれる、中国の人種差別政策を見学に行きました。

街中は監視カメラがブドウの房のように設置され、ショットガンや自動小銃で武装した警察官であふれています。街全体が巨大な監獄のようなものです。

いたるところに検問があります。西洋人のように彫りの深い顔立ちのウイグル人はそのたびに荷物や服装をチェックされています。が、支配民族である漢人はノーチェックです。日本人の私ものっぺりとした顔立ちから漢人と同様に、大半の検問を素通りすることになりました。

帰国後、在日ウイグル人に聞きますと、ウイグル人はどこにも行くにも、検問のせいで漢人よりも多くの時間と手間がかかるそうです。常に警察に疑われているという心理的ストレスもたいへんなものがあります。

しかし、街中を歩いているウイグル人はまだマシなのです。彼らの家族や友人の多くが、強制収容所で、漢人化教育を受けさせられています。欧米諸国や人権団体によると、その人数は１５０万人から３００万人に上るそうです。拷問や性的暴行を伴うもので、大勢の死者が出ています。

実際、私自身、ウルムチの街を歩き、漢人とウイグル人の比率にたいへんな違和感を覚えました。１０人いれば、ウイグル人は１人くらいしかいないのです。これも在日ウイグル人から聞いたことですが、彼も「毎年、帰省するたびに街中からウイグル人の姿が減っているので、おかしいと思っていた」そうです。

ウイグル人はどうしてここまで苛烈に差別されているのでしょうか。在日ウイグル人団体「日本ウイグル協会」や明治大学の水谷尚子准教授によると、中国共産党の主導する「一帯一路」政策が一因です。

ウイグルは古来より、シルクロードの要衝です。天然ガスなどの資源も豊富です。そんな場所に漢人に同化せず、場合によっては武力反抗も辞さないウイグル人にいてもらっては非常に困るのです。

強制収容所のほかにも、人権団体アムネスティ・インターナショナルによると、一般の人々もイスラム教の礼拝は禁止。豚肉を食べないなど宗教的な食事もできません。子供たちは寄宿制の学校で、北京語による漢人化教育を受けています。ウイグル語を話せず、実の両親とコミュニケーションがとれないケースもあります。若い女性にいたっては、漢人男性との強制結婚（断れば自身や家族が収容所に収監される）さえ報告されています。

ウイグル人の存在をなかったことにしようとする、まさに民族浄化に他なりません。私は、８月に香港の民主化デモを見学しましたが、香港人の根強い危機感の背景には、やはりウイグルがあります。香港人もまた存亡をかけた戦いをしています。

日本政府はウイグルや香港について、中国政府にほとんど何も言っていません。そればかりか来春、これらの民族浄化を主導する習近平氏を国賓として迎えます。全く情けない限りです。

日本は戦後７４年間、平和国家として一度も戦争をしてきませんでした。豊かで治安が良い、自由で民主的な国家を運営して参りました。一方で、中華人民共和国は戦争に明け暮れ、各地で自由化運動を弾圧してきました。

天安門事件の時、西側諸国で真っ先に中国政府に手を差し伸べたのが当時の自民党政権でした。中国は息を吹き返し、経済発展を続け、日本を追い抜きました。日本人は「豊かになれば、中国は自由で民主的な平和国家になる」と考えていましたが、たいへんな誤解でした。尖閣諸島には毎日のように公船が押し寄せています。ウイグルやチベット、香港はご覧の通りの惨状です。

中国はアメリカとの間で貿易摩擦を抱えています。経済は共産党政権の生命線です。これまでは経済が良かったから、国民はおとなしく言うことを聞き、独裁政権は好き勝手できたのです。

そういう点で、経済が低調な現在、中国政府は国際世論を聞かざるをえない状況に陥っています。日本人の声は我々自身が思っている以上に大きいのです。

「ウイグルは対岸の火事ではありませんよ。明日は香港、あさっては台湾、明明後日は日本ですよ」。ある在日ウイグル人から、かけられた言葉です。ウイグル人も香港人も台湾人も中国共産党に虐げられた人々は皆、日本人に大きな期待を寄せています。

習氏の来日を控える今、中国政府の非道に怒りの声を上げなければ、後世にたいへんな禍根を残すことになります。子孫に顔向けできません。稲門会の皆様方にはウイグル人やチベット人、香港人の苦境に心を寄せていただければ、と思う次第です。　（山元　信之　著）

文章表現力の向上――時間に余裕のできた今、勉強しよう

瀧本幸男（1964 年、理工卒）

ここ 2 ヵ月間は他人の書いた文章を読み校正するという、脳の別の部分を久しぶりに使っておりました。それによって昔の教訓を思い出すことになり、皆さまへのご参考になることかもしれないと思い、以下に拙文を述べさせていただくことにします。

この話はもう 40 年も昔のサラリーマン時代の頃の経験からはじめるのが良さそうに思います。
その会社は毎年数百人の大卒者を受け入れる大電機製造企業の一つでした。入社後数年ないし十年程で組合員である一般技術者から課長、部長という会社側人間へ昇格するための試験がありました。技術力の成果は日常的に査定されています。優秀な技術者として評価される人物でも、会社側管理者になることを考えると、対外的にもまた部下に対してもそれなりの知識と経験を持ち、また尊敬されるような人物としての「品格」を備えていることが要求されます。この要件を満たすか否かは実際に多くの面接官を配して採点するのは難しいので、当然のこととして筆記試験が行われていました。
筆記試験では小論文作成が必ず出題されます。問題は示されていませんが、課題の内容なら当然ある程度推定できます。本人が見た社内の問題点をいかに解決するか、つまり問題発見能力とその解決法です。しかし課長への昇格試験では、全社的あるいは対外的な視点の問題では広すぎ、自分の部門およびその関連部門に関する問題を捉え、身近な問題を普遍化する眼であり、当然のこと専門分野を含むことであります。つまり技術部門は技術について、人事部門は人事に関することなどを今までになく「広い」視点で、あるいは今までになく「高い」視点で社内の問題としてみることであると言えます。

ここでまた、技術屋は本当に文章作成を行わなければならないのか、ということが問題提起されました。文章担当あるいは人事部門の文系出身者に書かせればよいではないかという意見です。本当でしょうか？私は技術者本人こそが文章を適切に書けるものとして、技術提案書、取り扱い説明書、学会発表論文、対外交渉に必要な手紙などいろいろあると思っています。世の中にはこれらの文章作成の指導書がいくつも本屋に並んでいます。また会社では外部講師を呼んで講習会を開催することも行われています。私もそれらの講習会に参加し、また参考書を購入し勉強しました。
大変に有効な講習会もありました。しかし決して参考書通りには物事は進まないので、必要になったときに参考書を見るというような使い方に向いていると思いました。

ある時、上司が私を呼んで、何人かの昇級候補者に試験に向けた勉強をさせるよう指示しました。私は今まで自分が独習してきたことを伝え実践する良いチャンスだと思いました。
その人たちには自分たちの部門の問題点を発見することをさせました。まずその人に部全体を見渡せる私の席に座らせ、暫くそこで部門内を眺め、部門内で何が問題になっているかを見つけ出しなさいと言いました。それから良く知っている５Ｗ１Ｈの手法で普遍化することを考えるのです。
その結果を自分で文章化すればよいのだから簡単のはずです。何回か小論文にまとめさせました。自分で繰り返し読んで手を加えるという作業もさせました。
試験の後にどうだったかを尋ねましたが、「覚えていた通りに」全部書けたとの返事が戻ってきました。試験の結果は残念ながら不合格。一語一句を「覚えること」に集中し論理的普遍化の作業過程を軽く見たことで、説明が軽くなり、格調が低いものとなってしまったからです。

技術屋が真剣になって文書を作成するときがあります。自分の作ったものや装置を客先で間違いなく使って貰うための取扱説明書です。最高の性能を引き出すための操作法、安全に使用してもらうための注意

事項、それらに関わる絵図面等です。
それには先ず分かり易いことが第一に要求されます。何を云っているのか、どの図面のどの箇所を云っているのか、・・・技術者本人でなければ説明できない事柄です。
また提案書や特許申請書も技術者が自分で書きます。特許としての要求事項を理解して、それに対する具体的な解決策を詳しく説明します。提案書や特許申請書が審査官に十分理解され、納得が得られるという確

信を得られるまで細心の注意を払って仕上げます。

技術者であっても図面だけでなく文章表現能力が大切なことが理解できるでしょう。
ある講師の先生は昔から言われている「起承転結」で書かれた文章は良くないと言われました。「起承」は問題を提起して、それを敷衍してゆくところまでは良いが、「転」というところがよくない。今まで話してきたこととは打って変わって、逆のこと関係ないことなど論理の筋から外れることを指しているが、これは読者を惑わすことになるだけである。このようなことは小説の世界では効果的かもしれないが、相手を説得する文書では一筆書きで話を進めるべきだということでした。
論理的な文章を書く方法として、装置図面を用いて説明してみると「一筆書き」ということが分かります。文字通りの一直線でなくて曲がりくねっていても良いが、論理的に筋が流れていくことが必要であるということです。一筆書きの文章として日本昔話の「桃太郎」は良く出来ている、と図解式に説明してくれたことは今も忘れません。（いつか皆さんにも説明出来たらよいと思います。）

良い文章を書くためには自ら良い文章に触れることが大切です。私自身の文章は決して良い文章ではないと思っているので、良い本を読むこと、良い新聞記事を読むことなどを心掛けています。
これはもう何十年も前の感想ですが、素晴らしい文章を書く作家として私が本当にびっくりしたのはあの三島由紀夫の小説「金閣寺」の流れるような文体であります。ほんとうに口に出して音にして読むとその流れるような日本語の素晴らしさにこころ打たれます。
新聞のコラム欄は良く練り上げた日本語で表現していることが理解できます。また格調高く、文章の品位を保っています。どうしたら品のある格調高い文章表現ができるのでしょうか。
接続詞で長々と続く文章は「だらしない」という印象となります。

その点、英語の文章は簡潔明瞭を旨としますから、表現すべきは、簡潔さであり、また使われる用語、単語などが「品格・品位」として問題になります。長々とした熟語を使うより身近で短い適切な用語を見つける方が良いようです。
さて、駄文が続きましたが最後に私が言いたいことを述べましょう。
今回、大和稲門会創立 25 周年記念誌を作成するにあたっていくつもの文章を読ませていただきました。
石川会長の文章はよく練られており、読み返すたびに大変に素晴らしいと何度も感服しました。
それに比べてもっと自分の文章を批判的に読んだらよかっただろうにと、思えるものがいくつかありました。それは単に表現法が問題なのではなく、肝心の内容について何を述べたいのかわからない、また場違いな文章（私の文章を含めて）もあったことです。またいつの日か文集を作るときがあるでしょう。それに備えて小人数の勉強会などができれば素晴らしいと思いました。(完)

あの夏の日～元台湾少年工の里帰り～を終えて

市民劇団演劇やまと塾第 28 回公演

やまと塾顧問　　水野昂子（ｓ35 年 3 月一文卒）

2019 年 6 月中旬の本公演「発会式」（稽古始め）から 9 月 1 日の公演の日まで、あっという間に時が流れた。毎週、土曜日曜は日中から夜まで必ず稽古があった。大道具、小道具作り、衣装の選定など、稽古以外にも、準備することがたくさんあったが、全員が協力して、公演の日を迎えた。客席一杯の観客からは、大和に起こったあまり知られていない戦争の悲劇と、今後若者たちに期待する日台交流への希望に共感する声が聴かれた。また、善徳寺に建立された台湾少年工の慰霊碑や、泉の森にひっそりとたたずむ四阿
「台湾亭」を実際の舞台で観ることができ、印象に残ったとのアンケートもいただいた。

公演後も、会計報告や、観客数の確定、市やボラ連他への報告書作成、協力者への挨拶等々、やるべきことは残っているが、9 月の中旬になり、ようやく緊張感なく、休日を自宅で過ごしている。当面の目標をなくし、寂しいような、ほっとしたような不思議な気分である。
反省会は台風が接近する 9 月 9 日に行った。

過去 5 年間演出指導を受けた　井上学氏が今年度は監修に回られ、やまと塾が全面に出て、脚本・演出・出演・製作等を行ったのだが自覚をもってことに当たり、未熟ながら全員が、達成感をもって、公演活動に参加した様子がうかがえた。

本公演には、早稲田大学大和稲門会長で、高座日台交流会長の石川公弘氏をはじめ、多くの大和稲門会員や他地区からの会員にもご観劇いただいた。
チケット購入他多くの応援をいただき、心強いものがあった。深く感謝申し上げます。

石川氏の 7 歳年下の実の妹さんは、南林間にお住まいである。
その笹森廸子氏より感想をいただいたので、一部抜粋して掲載させていただく。

「最初からドキドキして鑑賞しました。兄の本（石川公弘著「二つの祖国を生きた台湾少年工」）も読んでいましたが、劇の力はすごいですね。1 時間 40 分にまとめ、皆さまに分かっていただく、今回は特にすごい作品の公演だったと思いました。私の記憶もプツリプツリ切れていますが、寮が火災になり真っ赤に燃えたことを思い出します。私は防空頭巾とオーバーを着せられ、4 人いた舎監の一人の家に逃げたことを覚えています。　父に会いに、台湾の方がよく見えていたのは覚えています。「なぜだろう？」と不思議に思ったものでした。現在は公園になっている炊事場と大きな煙突が聳え立っていたのが印象的でした。
この度の「の夏の日」の公演で、兄の半生の集大成をしてくださったように思い感謝いたします。・・・・。

やまと塾では、公演演目を決める前、昨年の 12 月に、石川公弘氏を講師にお招きし、台湾少年工についての勉強会をイコーザ学習室で持った。

第 2 次大戦中に台湾から、日本の労働力を補うべく延べ 8400 余名が日本にやってきた。大和の上草柳の宿舎に生活し、座間の高座海軍工廠で働いた事実は、
塾生もあまり知らないことだった。まして、工廠で新鋭戦闘機「雷電」を作るために忠実に働き、終戦まであと 2 週間余りという 7 月 30 日、工場から帰宅する少年工に銃弾の嵐が吹き、6 名の命が奪われたことには、塾生も驚いた様子だった。
氏から、スライドや写真をご提示いただき、説明を受け、「難しい内容だが、塾で取り組もうか」という気持ちの動きはこの勉強会から始まった。

戦争の悲劇と戦後を経て、今を生きる大和の方々と平和の尊さをもう一度考えてみようというのが、公演意図であった。

昨年 10 月 20 日~21 日に台湾高座会留日 75 周年歓迎大会が大和、座間、海老名、そして静岡志富士川で開催された。座間市芹沢公園での台湾少年工（海軍軍属）顕彰碑除幕式には立派な歌碑が建てられた。この事実を「あの夏の日」
の後半に据えた。歌碑の除幕式の前日に、芹沢公園の石碑の前で、桜詩吟サークルの面々がリハーサルを兼ね、歌碑 3 首を吟じようという趣向だ。

監修の井上氏からは、「歌を単に詠む事も可能だが、詩吟として吟ずるのであれば、立派に吟じるように。」との指示をいただいた。困惑する 3 人に救いの手が伸びるように、大和稲門会では、同好会活動の一つ、詩吟同好会が一年前に
発足していた。毎月第 4 水曜日、シリウス生涯学習センターで開かれる詩吟の会。大和稲門会副幹事長の蒐場直一氏を講師とし、近隣の稲門会委員も参加。
楽しい 2 時間の勉強である。「不識庵機山を撃つの図に題す」「白虎隊」や「偶成」を習ったが、そこに舞台で吟ずる短歌のご指導も入れていただいた。
蒐場氏は岳精流日本吟院の幹部をなさっており、基礎から丁寧に教えていただいた。ちなみに吟じた短歌は
・短歌　石川　公弘　作
　八千の　台湾少年雷電を　造りし歴史　永遠に留めん
・短歌　洪　坤　山　作
　北に対き　年の初めの　祈りなり　心の祖国に　栄あれかし
・短歌　佐野　多香　作
　朝夕に　ひたすら祈るは　台湾の　平和なること　友の身のこと

である。観客からの拍手もいただくことができた。

この吟詠にとどまらず、歌唱指導の冨田康子先生、振付ダンス指導の乾智恵先生、それにキッズダンスクラブの生徒たち。出演協力をいただいた、方々のお力で、「あの夏の日」～元台湾少年工の里帰り～の公演を無事終えることができたことに、お礼を申し上げます。

大和稲門会春のハイキング報告（令和元年５月２３日）

港の見える丘公園と山下公園で最盛期を迎えたバラを観賞

今年の春のハイキングは、五月晴れに恵まれた 5 月 23 日開催、これまでで最多の 14 名が参加し「港の見える丘公園」「山下公園」でバラを観賞しながらのハイキングとなりました。

相鉄大和駅に集合し、みなとみらい線の元町中華街駅で下車、エレベーター、エスカレーターを乗り継ぎアメリカ山公園入口へ。公園内を抜け外人墓地、横浜気象台前を通り「港の見える丘公園」入口に、一面にバラが咲き乱れ私たちを迎えてくれた。ウィークデーであったが見物客で賑わっていた。

公園内のバラ園はバラの種類により「イングリッシュローズの森」「香りの森」「カスタードの庭」などで構成。色とりどりのバラが私達の目を楽しませてくれた。皆さん三々五々のグループで思い思いにバラを観賞し、写真撮影を楽しむ。その後は園内のイギリス館、大佛次郎館、神奈川近代文学館を見学。また、展望台から横浜港を一望したり、山手 111 番間のテラスでのんびりコーヒーブレイク。

昼食の集合時間前には公園入口に建つ KKR ポートピアのレストランに全員集合、当ホテルで別の会合に参加の中西会員も合流し、みんなで乾杯、美味しい食事に話も弾む。

食事の後、山下公園に向かった。皆さん歩こうという事になり、隣接のフランス山公園から急な坂道を下ると山下公園に到着。山下公園のバラも港の見える丘公園に匹敵する美しさ。バラ園の中を暫く散策し一旦解散となった。　　折角の機会なので船に乗りたいとの希望があり、8 名のメンバーはシーバスに乗船し、赤レンガ倉庫、みなとみらいなどに寄港し

横浜駅東口に続く桟橋に到着。相鉄線で帰路に向かったが大和駅でお薦めのコーヒー店に立ち寄り漸く解散となりました。

美しい薔薇に酔い、美味しい食事をいただき、横浜港クルーズを楽しみ、最後は香高いコーヒーをいただくという盛りだくさんの楽しい一日でした。　　（文責　児浦）

【参加者】

石川、遠藤、遊佐、水野、瀧本、宮崎、村岡、稲葉、小澤　渡辺
佐竹、加藤、中西、児浦　以上 14 名

秋のハイキングに参加しませんか

今回は白金台にある東京都庭園美術館および隣接する国立科学博物館自然教育園を訪問します。

東京都庭園美術館　　旧朝香宮邸を戦後国賓、公賓の迎賓館であったものを、1983 年東京都庭園美術館として一般公開。

庭園は芝庭、日本庭園、および西洋庭園があり紅葉の時期は特に美しい。

美術館の建物はアール・デコ様式で重要文化財に指定

現在開催中の展覧会はアジアのイメージ　日本美術の「東洋憧憬」（日本の美術家達が東洋の歴史と美術から受けた影響）

入場料　庭園のみ　100 円。美術館入館の場合 500 円（庭園共用）いずれも 65 歳以上

国立科学博物館自然教育園

都心にありながら自然の面影を残す数少ない森、特に黄葉から紅葉の順に色づく有様を観賞できる。（ぐるっと一周のコースあり）

入場料　65 歳以上無料（一般 320 円）

開催日　　11 月 26 日（火）

集合場所　東急中央林間駅　改札口付近　10 時集合

東急田園都市線、溝の口より大井町線、大岡山で目黒線乗車

白金台下車、徒歩 6 分（1 時間程で現地到着します）。

昼食場所は検討中、後日連絡します。

参加希望者は11.月 16 日　児浦まで　090-9333-4479

E メール　koura0114@jcom.home.ne,jp

年会費納入についてのお願い　（令和元年 9 月）

当稲門会では会員の皆様から年会費をいただき、「稲門やまと」の発行費用をはじめとして当会の運営費に充当させていただいております。

当会の活動状況につきまして、本広報誌「稲門やまと」およびホームページによりご報告致しておりますが、この度、創立 25 周年を迎え創立 25 周年記念誌を発行すると共に会の活動の一層に充実に努めてまいります。

下記の「年会費の納入状況」におきまして、本年 9 月までに年会費をいただいた方を掲載いたしました。まだ納入されておられない方は同封の郵便振込票をご利用いただき年会費の納入をお願い申し上げます。。

なお、振込料金が 4 月から値上げされました。振込料金は稲門会の負担となっており、、経費削減のため極力 ATM での手続にご協力ください。

（ATM80 円→150 円、窓口 130 円→200 円）

会費納入についての質問等につきましては下記担当までご連絡ください。

会計担当　児浦義文　電話　046-274-0628　E メール　koura0114@jcom.home.ne,jp

◎年会費納入状況　（令和　元年　9　月 30 日現在）

〔令和元年度分（以降も含む）までの会費をいただいた方〕

遠藤三紀夫、大澤　善勝、橘川　泰一、國方　隆　、小坂　悟　、小島　達之
小林美佐子、小林　晃　、佐藤　逸郎、佐藤　洋子、柴田　哲也、清水美加子，
杉山　充　　鈴木　信義、関根　実　　高田　博　　滝本　幸男、中西　剛　、
中　　晃　　古木　敏幸、保坂　保　　眞鍋　藤正　田中　政弘　　〔23 名〕

〔平成 30 年度分までの会費をいただいた方〕

石川　公弘　石井　稔夫　岩本　武夫　碓井　敦子　遠藤　廣　　大澤　孝征
太田　勝人　小澤　重晴　加藤　敬一　加藤　英雄　加藤　晴夫　北沢　寛
児浦　義文　土橋　仁志　中丸　敬治　蒐場　直一　町田　浩文　三重野省二郎
水野　昂子　宮崎　顕　　村岡　猛　　遊佐　喜弘　横沢　和信　渡辺　伸明
〔24 名〕

上記のほか匿名希望の方 1 名あり 48 名年会費をいただいております

（上記は順不同、敬称は省略させていただいております）